一

磐音が四本の扇を土産に江戸を対岸に見る戸田の渡しに辿り着いたとき、すでに霜月も終わり、師走の声を聞いていた。

なにしろ加賀金沢城下を発ってはみたものの北国下街道はすでに雪の中、旅は難渋を極めた。荒海からの烈風と雪が磐音の行く手を阻んだ。

が、それは覚悟の前だ。

なにしろ路銀が乏しかった。

金沢を出たとき、懐に一両と銭が何十文かあるだけで、旅籠には泊まらず、地蔵堂や禅寺などに厄介になりつつ、旅を重ねてきた。だが、最大の難所の親知らずを超えた糸魚川で路銀も尽きた。

磐音は宿場外れで旅の者の荷を担がせてもらったり、百姓家で野良仕事を手伝わせてもらったりしながら、なんとか中山路に辿り着いた。

雪の碓氷峠を越えて、ほっとした。

街道には身を刺す空っ風が吹いていたが、もはや雪はなかった。

高崎城下で町道場の師範代に十日余り雇ってもらい、なんとか江戸までの路銀を工面した。

渡し舟に乗った磐音の懐には、銭が数十枚ちゃらちゃらと寂しく音を立てているばかりだ。

これでは占領とかいう奈緒の身請けどころではない。

明日からの食い扶持にも困る。が、江戸に戻れば、知り合いもいる。

渡しを降りると板橋宿に入り、懐の銭を確かめた後、蕎麦屋に入って蕎麦を食べた。それがなんとも美味で知るまで残さずに飲み尽くした。昨日からまともに食べていなかったのだ。

（よし、朱引内じゃ）

磐音勇んで、板橋宿から加賀藩の下屋敷前お通りながら、本座者と新座者の暗闘を遠い昔の出来事のように思い出した。

駒込追分で七つの時鐘を聞いた。

湯島聖堂から神田川を渡れば、もはや懐かしい江戸の町だ。

こんなにも江戸を懐かしく思ったことはなかった。

神田川沿いに柳原土手を浅草御門まで下ると両国西広小路が広がり、米沢町の角には、江戸両替商の雄、今津屋の分銅看板が風に揺れていた。

まずは今津屋に挨拶して、明日からのしごとを頼んでおこうと店先に入ろうとした。

そのとき、中から悲鳴が上がり、暖簾を乱暴に叩き落とすようにして、浪人たちが飛び出してきた。

先頭の浪人は抜身を下げていた。

磐音は体を開いて、

「泥棒！」

聞き慣れた老分の由蔵の声が響いた。

浪人たちは身を引いた磐音にぶつかって、手にしていたものを路上ばら撒いた。

小判が夕暮の光で鈍く光った。

「どけ、どかぬか！」

怒号とともに斬りかかろうとする抜身の腕を掻い込んだ磐音が、身を捻りざま気合いを入れた。

大きなからだが虚空に舞い、

どすん！

と地面に叩き付けられた。

二人の仲間が刀を抜くと、問答無用に斬りつけてきた。

磐音は、白刃の下を掻い潜って懐に飛び込むと一人の鳩尾を拳で突き、もう一人の胸に肩で体当たりした。

一瞬のうちに三人の浪人が地面に倒れ伏して呻き声を上げた。

「どなたかはぞんじませんが、よう手捕りしてくれました。礼を申しますぞ」

手に算盤を握った由蔵が足袋のまま飛び出してきて、磐音に礼を言った。

「由蔵どの、ただ今戻りました」

と無精髭の顔を突き出した。

「おおっ、坂崎様。よう、戻られましたな」

由蔵が大声をあげ、見世から奉公人たちが飛び出してきた。そして、奥からおこんまでが血相を変えた顔で姿を見せた。

「さ、坂崎さん……」

「老分どの、おこんさん、皆さん、ただ今戻りました」

磐音が丁寧に挨拶をした。そして、

「ああ、そうだ。この者たちをどうしましょうか」

と地面に倒れた浪人を見た。

「宮松、番屋に知らせておいで！」

小僧の宮松が番屋に走っていった。

「近頃、明るいうちから押し込み強盗が頻発しましてな。それも独りで夕暮時にすうっと両替屋などに入ってきたは、いきなり帳場格子を乗り越え、番頭などを斬り殺しておいて、金を盗んでいく乱暴な手口です。大方、この者たちもその手口を真似たものですよ。いきなりだんびら振り回して、銭箱に手を突っ込んだ。危ないったらありませんよ」

由蔵の説明に磐音が、

「かようなところでは邪魔じゃな」

と二人の襟首を掴んで店の土間に運んだ。さらに一人を連れ込んで、両手をばんばんと叩いているとおこんが、

「坂崎さんったら、まるでおこもさんのような臭いがするわよ」

と言い出した。

「おこんさん、仕方ござらぬ。路銀ものうて加賀金沢から旅してきたのでな、久しく湯にも入っておらぬ」

磐音が江戸の知り合いに再会した安堵感をこめて、のんびりと答えた。

「呆れた」

「と言われても銭がのうてはどうにもならぬでな」

そこへ番屋から番太や御用聞きの手先たちが駆けつけてきて、強盗を働いた浪人三人を高手小手に縛り上げると番屋に引っ立てていった。

「おこんさん、すまぬがなんぞ食べさせてはもらえぬか」

「おこもさん、いくらでも飲み食いさせてあげますよ。その前に湯屋に行ってらっしゃいな。今、湯銭と着替えを用意しますからね」

深川育ちのおこんがてきぱきと動いて、磐音は脇差だけの姿で終い湯に行かされた。

四半刻後、薬研湯の湯船で磐音はのびのびと手足を伸ばして、安堵の吐息をついた。

肌は何度も糠袋でこすってひりひりしていた。だが、ぽろぽろと垢が取れた肌はつるつるして気持ちがいい。

（江戸に戻ってこられた）

それだけで嬉しかった。

その上、江戸には仲間がいて、奈緒がいるのだ。

明日からは仕事と奈緒探しだ。

湯船の中で心に決めた。

今津屋に戻るとまだ暖簾はかかっていたが、すでに台所の広板の間に膳部の用意ができていた。そこは今津屋の奉公人が何十もの膳を並べて食事することろだ。台所では勝手女中たちが夕餉の仕度に追われていた。だれもが見知って顔だ。

「座敷に運ぶ」

おこんが訊いた。

「いや、こちらが気楽でよい」

「まあ、坂崎さんはどこでご飯を食べようと他人は関わりないわね」

そう言いながら熱燗を運んできた。

「酒もよいが、飯のほうがありがたい」

「無事江戸に戻って来たお祝いよ。いっぱい飲みなさいな」

「さようか」

おこんの酌で酒を口に含んで喉に落とした。風呂上がりの体に染み渡るように酒が広がった。

「美味い、美味いなあ」

磐音の声が無邪気に響いた。

「一体全体どこをうろついてたのよ」

おこんが言うところに老分の由蔵も顔を出した。

「豊前の小倉から手紙が届いたで、おくにもとと長崎の様子はおよそ掴めましたがな」

「そうでした。小倉城下の飛脚問屋がこちらの名前を承知していて、便宜を図って半の御雇船に乗せてくれました」

「小倉からどうして金沢なんて行ったのよ」

おこんが空の杯に酒を注いだ。

「おこんさん、小倉から赤間関の後、山陰路を通って京へ行き、そこから加賀の金沢まで奈緒どのの跡を辿って旅をしたのです。そう簡単に話せるものではない」

一杯の酒で陶然となった顔で磐音が言い、粕汁の匂いに鼻をくんくんさせた。

「おこんさん、こりゃ、坂崎の腹を満たすことが先だ。話はそれからだね」

と諦め顔で由蔵が言い、おこんが頷くと膳の仕度に掛かった。

磐音から由蔵とおこんが話を聞き出すことができたのは、夕餉の後、階段下の狭い部屋に場所を移してからのことだ。

話の間じゅう。

「なんてことなの」

「途方もない話ですな」

「坂崎さんの行く先々にはどうしてそんなにも争いごとが起こるの」

などと相槌を打ちながらも、二人は驚いたり怒ったりした。

話を終えたとき、磐音は激しい稽古のあとのような疲労感とともんい、ほっと安堵した思いも感じていた。

磐音にはかようにも親身に話を聞いてくれる人がいるのだ。

「坂崎様、途方もない旅をしてこられましたな」

と由蔵が溜息をつくように言ったが、おこんはしばらく口を開かなかった。

そして、

「奈緒様はなんという目に……」

という嘆きにも似た言葉が洩れ、瞼が潤んできた。

「京の島原を出た奈緒様には、すでに千両近い値がついていたんですか」

由蔵も奈緒の身に思いを馳せた。

「奈緒様はこの江戸に連れてこられたのね」

「京の大原口で別れた那尾どのが、えどに売られていくと女衒が話すのを聞いています」

「どうしたものかしら」

とおこんが由蔵に訊く。

「まず、千両もの値の花魁を買い取ることができるのは吉原だろう。が、こちらにはあいにくと吉原には馴染みがない」

と思案に暮れた。

「明日からまず吉原に問い合わせてみます。知り合いもございますれば……」

磐音は豆造の母親おしずが吉原に身を落としたときに会いに行き、吉原の廓内を仕切る四郎兵衛会所の頭、当代の四郎兵衛と知り合っていた。

「奈緒様の行方を知ってどうするのよ」

おこんが焦れたようにその先を訊いた。

「まずは奈緒どのが元気でいるかどうかを確かめるのが先決じゃ。そのあとのことは、そのとき考える」

「そんな悠長なことを……」

「おこんさん、それがしの懐にはびた銭一文とてない。千両と言われても困るのだ」

磐音の言葉に由蔵が小さく頷いた。

「おこんさん、長期戦になる。ここは坂崎様のようにでんと構えたほうがよさそうだ」

「男はこれだから、頼りにならないわ」

と一人ぷんぷん怒っていた。

「おこんさん、馳走になった。そろそろ長屋に戻らねば、両国橋の植えで眠りそうだ」

磐音が残った茶を飲み干し、立ち上がろうとした。

「坂崎さん、今夜はうちに泊まっていけば」

おこんがそう言うと、

「おこんさん、今夜はゆっくり寝せてあげることが先だ」

と由蔵が言った。

「仕事もしないのに夕餉を馳走になり、泊めてもらっては恐縮です」

磐音が言いかけると、

「先ほどの浪人三人組のこともありますよ。あやつらがうちの銭箱から掴み出して持って行こうとしたキンスは百両を下りません。それを取り返してもらったんです」

「そうよ、あいつら、叩けばいくらでも埃が出るわ。今夜はここに泊まっていらっしゃいな」

と最後はおこんがやさしく言い、夜具を伸べるために立ち上がった。

その夜、磐音は久しぶりに暖かい布団に包まれて熟睡した。まだ台所では奉公人たちが夕餉を取っている刻限にだ。

磐音が寝入った刻限、由蔵とおこんは主の吉右衛門に奥に呼ばれて、磐音が戻って来たことを報告した。

「なんともえらい苦労をなされたものですなあ」

吉右衛門が嘆息した。

「旦那様、なにかよい知恵はございませんか。私めは艶っぽい里には縁がございませんので」

由蔵が旦那に願った。

「吉原ばかりはわれらの世間と異なる場所です。廓法という仕来りできっちりと守られていますからな、仕来りどおりの手続きを踏まないことには、奈緒様は坂崎様の許には戻ってこられますまい」

「最後は金の力にございますか」

「最後はな。だが、今は奈緒様がどこの楼に身売りされたか、知るのがまず先ですよ、おこん」

吉右衛門も同じことを言った。

「藩の騒ぎが鎮まったと思ったらこんどは奈緒様の一件と、坂崎さんは、損な役回りばかりを引き当てる人ですね」

おこんの嘆息を吉右衛門が、

「だからこそ、私どもは知り合いになれたのです」

と応じて、由蔵が頷き、

「老分さん、坂崎さんに今日の働き賃を払ってきだされよ」

「はいはい、そのつもりで旦那様のお許しを得ようと思っておりました」

「坂崎様が食べるくらいは、いくらでも仕事があるでしょう。なにしろ師走ですからな」

「心得ました」

と主従が頷きあった。

翌朝、朝餉を食した坂崎磐音は、両国橋をわたって懐かしの深川へと足を踏み入れた。五月の末に深川を出て、半年以上が過ぎていた。

深川六間堀の金兵衛長屋の木戸口には、どてらを着て、首に綿の入った布を巻いた金兵衛が、縁日で買い求めた万年青の鉢を陽だまりに出して眺めていた。

「さ、坂崎さん」

おこんの父親の金兵衛が口をあんぐりと開けた。

「長々と留守をいたし、家賃もだいぶ滞っておりましょう」

「そんなことはどうでもいいが、よう戻られた」

金兵衛は小倉から手紙を貰って、これは長くなるなと考えていたと言った。

「まだお長屋はございますか」

「あるにきまってますよ」

磐音は、懐の財布から二分を出して、

「当座の家賃にございます」

と支払った。

「江戸に戻った早々で銭に困ってるんなら、後でもいいんだよ」

「確かに、昨夜帰りついたときは文無しでした……」

と今津屋の店先の一件を話し、

「由蔵どのが二両も始末賃を払ってくれました」

「ゆうべは今津屋に泊まったのかい」

「はい。おこんさんに世話になりました」

「時折りな、おこんが戻ってきて長屋の掃除をしていったから、埃も溜まっていますまい。まあ、九尺二間でもわが家はわが家、師走のあｋぜなど入れなされ」

磐音は金兵衛に言われて、長屋の腰高障子を開けた。すると金兵衛の言葉どおりに、部屋は住んでいたときよりも綺麗に片付いていた。

磐音は金兵衛の言葉に従い、裏の障子を引き開け、風を入れた。すると師走の光がさっと畳に流れ込んできた。

磐音は井戸端に行き、水瓶に新たな水を組もうとした。すると水飴売りの五作の女房おたねをはじめ、長屋じゅうの女たちが出てきて、

「お侍、待ってたよ」

「なんだか、おまえさんがいないとどてらの大家まで体が萎んだようで張り合いがないよ」

などと言って帰宅を歓迎してくれた。

「また世話になるがよろしくな」

磐音は水瓶の水を満たすとまず、鰹節屋から貰ってきた箱の植えにおいてある三柱の位牌に茶碗で水をあげ、四本の扇を供えて頭を垂れた。

（慎之輔、琴平、舞どの、江戸に戻って参った。江戸にて奈緒の行方を探す、力を貸してくれ）

と友たちの位牌を願った。

今津屋から貰った金子の残りで米、味噌など当座の食い物を買ってようやく安心した。

（よし）

磐音は、腰に備前包平と脇差を落とし込むと立ち上がった。